



1 『その鉄塔に男たちはいるという』舞台写真(写真左・撮影：谷古宇正彦)

2 『B級ブラクティス』結成初期の公演写真(写真右・提供写真)

3 『隣の芝生も。』舞台写真(写真中央・撮影：谷古宇正彦)



▲2014年8月1日号

平成26年9月、進路や人生に悩むすべての人に送る「土田の人生劇場」を披露するトークライブを開催しました。

ていたんです。でも演劇って面白そう  
と思い、友達と始めました」と、演劇  
の世界に足を踏み入れます。  
軽い気持ちで演劇を始めた土田さん  
にその年の冬、早くも転機が訪れま  
す。「鴻上尚史さんの『デジャ・ヴュ』  
という作品の公演でなぜか主役に抜  
きされたんです。あれほど緊張したこ  
とはこれまでなかったんだけど、終  
わった後は充実感でいっぱいでした  
と当時を振り返ります。  
そして、この体験が土田さんの内面  
を大きく変えます。「高校までは、周

囲が楽しんでいても自分は楽しめな  
い、ずっとそんな孤独感や虚無感にさ  
いなまれていました。でも主役を演じ  
たことで、緊張感だったり、充実感  
だったり、人間的な感情が芽生えまし  
た。もう、一生演劇をやろうと思いま  
した」とずっと抱えていた悩みを克服  
するとともに、演劇をなりたいという  
ことを決意しました。  
その後、土田さんは大学を中退し、  
平成元年に「B級ブラクティス」とい

う劇団を結成します。この劇団は後に  
名前を「MONO」に変え、今に続きま  
す。これまでに上演した作品はすべて  
土田さんが作・演出を担当していま  
す。その中の代表作『その鉄塔に男た  
ちがいるという』は、外国の戦地に慰  
問で送り込まれた芸人らが、森の中の  
鉄塔に脱走し、戦争が終わるのを待つ  
という内容。北朝鮮が弾道ミサイルを  
発射した頃、気軽に「戦争すればいい  
じゃん」と話す人がいたことに、この  
物語の着想を得たと話します。  
土田さんの作品には、その時々社の  
会情勢が反映されたものがありますが  
『演劇を通して啓蒙しよう』と思っ

ていません。楽しいと思ってもらえるも  
のを表現し続けたいです」と脚本を書  
く上での心構えを語ります。  
長く大府から離れた暮らす土田さん  
は、地元大府のことについて、「大府  
は住んでいた頃から人口が増えまし  
たね。これは発展している証し。大き  
なまちなってほしいです」と大府への  
期待をのぞかせます。  
『演劇は表現の中ではマイナーな  
ジャンル。でも市民の皆さんに僕ら  
の演劇を理解してもらえようような活  
動を今後していきます」。土田さんは  
今後ふるさとに胸を張れる表現者  
であり続けたい。

# 演劇がくれた 「生きた感情」



劇作家・演出家・俳優

## 土田 英生

>> PROFILE 劇作家、演出家、俳優。1967年、大府市生まれ。神小、大府中、星城高校を経て、立命館大学に入学後、「立命芸術劇場」に入り演劇の世界へ。1989年に「B級ブラクティス」(現MONO)結成。1990年以降全作品の作・演出を担当。1999年『その鉄塔に男たちはいるという』で第6回OMS戯曲賞大賞を受賞。ドラマや映画の脚本も多く手掛け、代表作に映画『約三十の嘘』、日本テレビ系列ドラマ『斉藤さん』など。2020年、TBS系列ドラマ『半沢直樹』続編に役者として出演。

**京** 都を拠点に活動する劇団「MONO」の代表で、舞台の劇作・演出やテレビドラマの脚本など数多く手掛ける土田英生さん。劇作・演出・脚本・俳優・執筆・執筆とマルチに活躍する土田さんが、自身の原点や演劇に対する思いを語ります。

### 小学生で出会った芝居の世界

俳優として自ら演じることもある土田さんと演劇との出会いは神小小学校2年生の頃までさかのぼります。「学芸会で小鳥2という役をやったんです。セリフは『チュンチュン』だけだったけど、私のセリフに続いて、みんなが『チュンチュン』と言うので、特別な感じがしてうれしかったんです。人前で演じたのはこれが初めて」。演劇の原点はこの時だったといい、この時から脚本にも興味を持ちます。「小学生の頃に見た芝居で『自分ならこう書くのにな』と物語に違和感を抱くことがあったんです」と、小学生ながら脚本を意識していたエピソードを語ります。

### 演じることで爆発した感情

土田さんが本格的に演劇を始めたのは立命館大学時代。「最初はお笑いにも興味があったから落語研究会と迷っ